SENIOR STUDENT

CASE STUDY
ケーススタディー

授業を通じて、会社人間から社会人間へ移行中。「宿題に四苦八苦しながらも、充実した大学生活です」

江渕繁男さん（立教セカンドステージ大学第1期生）

江渕繁男さん

「僕が現役生だったころは学園紛争があり、まともに勉強せずに卒業してしまいました。運よく入社した松下電器産業に37年勤務して、昨年、定年を迎えたのですが、改めて自分の人生の目的はなんだったのかと考えてしまいました。そんなときに立教セカンドステージ大学が設立されることを知ったんです。これはオレを呼んでるぜ、と思いましたね（笑）」

と語るのは、立教セカンドステージ大学の第1期生、江渕繁男さんだ。

立教セカンドステージ大学は、今年4月にスタートした50歳以上のシニア限定の生涯学習講座で、名称には「大学」とついているものの、文部科学省認可の大学ではなく、学位が得られるわけではない。しかし、入学式は同校のチャペルで厳かに執り行い、授業も池袋のメーンキャンパスで開講するなど、中身はほとんど「大学」といっていい。

修業期間は本科1年間（専攻科1年）だが、必修科目やゼミもあり、「『学び直し』と『再チャレンジ』のサポートを目的とした新たな学びの場」（入学案内パンフレットより、大橋英五立教大学総長・立教セカンドステージ大学学長のメッセージ）なのである。

ところで、実務経験が豊富な江渕さんには、むしろ大学院のほうが適しているようにも思うのだが、「時間的にも精神的にも、そこまで本格的に学問の世界に足を踏み入れる自信がない」と言う。

「ありがたいことに定年後も顧問として週2～3日は出社していることもあり、時間が完全に自由というわけではないんです」というわけで、江渕さんが登校しているのは水曜から金曜日の週3回。全体の時間割は別掲したが、このほか学部生対象の「全学共通カリキュラム」も一部履修できる。

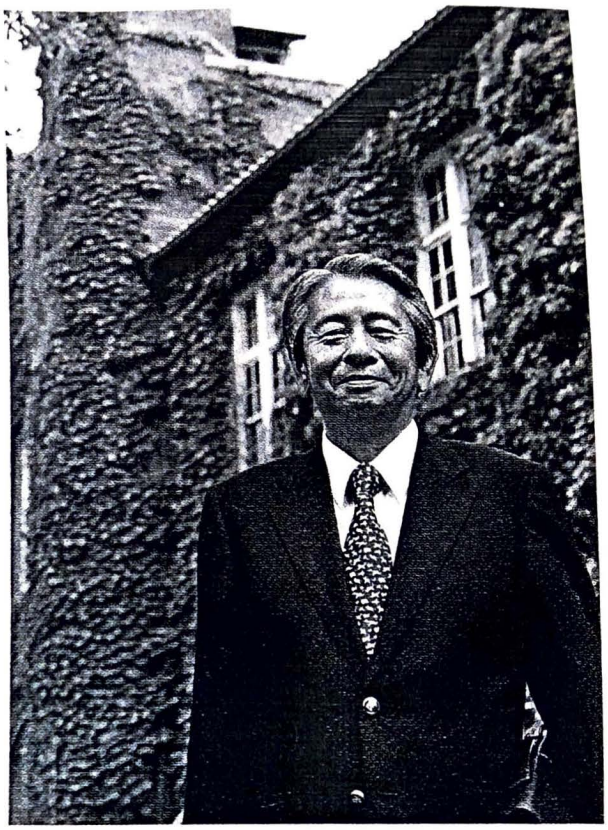
「全学共通カリキュラムでは、自分の子供よりも若い世代の学生といっしょに勉強しています。学長が入学式の式辞で『同じ立教の仲間なのだから、若い学生の態度が悪いときはしかってください』と言われたのですが、実際にはマナーが良い学生が多く、驚いています。私たちも大人として手本になれるように心掛けてますよ」

答えのない問いに悶絶したり「自分史」を執筆したり

立教セカンドステージ大学の授業

立教セカンドステージ大学2008年度前期時間割

	月曜	火曜	水曜	木曜	金曜
3限（13:10-14:40）			自分のからだと言葉を取り戻す		英語で味わう生きる喜び
4限（14:50-16:20）	コミュニティーデザイン入門	生命の多様性	セカンドステージと夫婦関係・親子関係	生涯現役という生き方	介護と看取り
5限（16:30-18:00）	NPO/NGOボランティア活動基礎論	社会老年学入門	セカンドステージとリーダーシップ論	現代史の中の自分史	現代世界論（必修）
	現代の葬送と墓		アジアの貧困とNGO		
6限（18:30-20:00）			ゼミナール1（必修）		



は前期・後期制。中でも江渕さんが特に興味深く感じているのは、木曜日の「生涯現役という生き方」と「現代史の中の自分史」。

「『生涯現役という生き方』では文学やアートの世界で活躍した人物の生涯を考察するのですが、授業で美術館に行き、作品を見ることも多々あります。今までも個人的な旅行で海外の有名美術館に行っていたのですが、そのときとはまったく違った鑑賞法なので新鮮です。これは美術鑑賞が趣味の女房が一番うらやむ科目です（笑）。

『自分史』は評論家でジャーナリストの立花隆教授が指導。日本経済新聞の『私の履歴書』を自分なりに書いてみようという授業で、毎回、10代から20代までとか、年代を区切って自分史を書いて提出するんです。『現代史の中の』とあるように、時代考証も必要。『ケネディ暗殺は高1のときだったかなあ』なんて昔の新聞記事を探すことも。この課題のおかげで週末がなくなるほどですが、立花教授は私たちの作文を全部読まれて、的確にコメントしてくれます。そのために徹夜することも珍しくないと聞いており、そういう熱意が直接感じられる授業です」

そして、もっとも意義深い授業として、金曜日の「現代世界論」を挙げてくれた。

「担当の北山晴一教授が次々と問いを出してきて、それを考えるという授業なんです。例えば、しがらみとは何か？　それはプラスなのかマイナスなのか？　そんな答えがないことを考えるわけです。

振り返ってみれば、ビジネスには必ず答えがあった。それがないこともある、ということに気づかされる授業なんです。最初の1、2回目までは先生の意図するところが分からず、悶絶してましたが、でも、おかげで思考のトレーニングができ、最近は会社人間から社会人間へと自分が変わりつつあるのではないかと思います」

文化行事委員として ゴルフコンペを開催

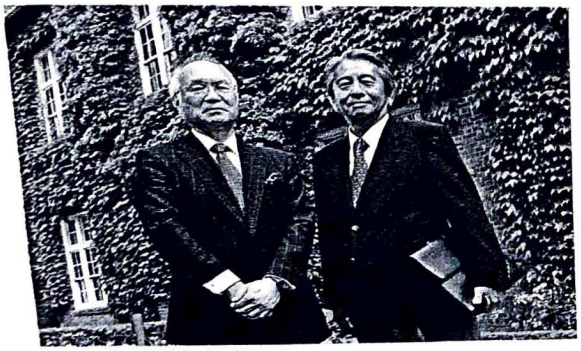
立教セカンドステージ大学の第1期生は全部で96人。うち男性50人、女性46人。平均年齢は60歳。メーカーやサービス業の経験者が比較的多いが、金融・教育・看護・NPO関係者、議員、主婦など多彩だ。大学卒が約半数で、高卒・短大卒や大学院卒もいる。

「こうしたさまざまなバックグラウンドを持つ受講生が、交じり合って、主体的に行動する仕掛けも作っています」と、同大総長補佐の坪野谷雅之先生は話す。

「それぞれの得意分野に合わせて、学生全員に委員を割り振るんです。もちろんゼミではゼミ長がいますが、それだけでなく、文化委員とか広報委員とか。江渕さんにはその行動力を見込んで文化行事委員になっていただきました。さっそく、ゴルフコンペを開催しましたよ。そこでご自身が優勝しちゃったんだけど（笑）」と先生がいえば、江渕さんも、「いえいえ、ハンディキャップ20ですから、たまたまですよ」と返す。

さて、勉強の話に戻ろう。同校は全受講生ともゼミが必修となっている。江渕さんが所属するのは坪野谷ゼミだ。

「先生のご専門は金融論ですが、受講生はそうした分野にこだわらず好きなテーマを選べます。僕の場合は、営業職のなかでも半導体や部品の営業に長く携わってきたので、それについて松下とソニーを比較検討してみたいのです。この研究をうまくまとめて、後輩のビジネスパーソンたちに残してやれたら本望ですね」



坪野谷先生（左）とともに